

佐藤勘助・愛子(亡き祖父と祖母)



ヘボン式について

2012年3月2日金曜日

ヘボン式を日本語のローマ字表記に普通に使っていますが、ヘボンというのはJames Curtis Hepburn (1815-1911)というアメリカの宣教師で医師のことをいうことを皆さんご存知でしょうか。ヘップバーン、ヘップバーンといっているうちにヘボン、ヘボンと言うよう(日本名：平文)になってしまったのです。だから、本当はヘップバーン式が正しいのです。ヘボン式は彼がペリーが1853年に浦賀にやってきた6年後に来日してローマ字表記を当時の日本人たちからききながら作り出したものです。ヘボン式の弱いところは長母音がうまく表記できないところにあります。私の名前はMr. Sato (つまり、サトさん) とされてしまうので、ペンネームでSir Ernest Mason Satow (1843-1929)というイギリスの外交官(「一外交官の見た明治維新」原題“A Diplomat in Japan”)に影響されてKen-ichi SATOWと書くようにしていました。しかしながら、イギリス人と間違われてしまうので、署名は佐藤賢一と漢字で書くのですが、ヘボン式を尊重しています。日本人になりたい外国人は沢山いるとおもいますが、外務省が邦人救助にあたるときに

日本人をさがしだすのにヘボン式でないと見分けがつかなくなってしまう苦労するので使っているようです(たとえばアリスちゃんとか)。しかし、麻生首相のときはプライミニスター・アッソウと呼ぶようにしていました。戦後、昭和天皇陛下がマッカーサー元帥に対して「陛下、元帥はこうっております」と通訳が言ったら「あっ、そう」と答えたのも有名な話です。通訳と翻訳は難しいですね。外来語をやっつけてカタカナにってしまうのは日本語を守るためですが、正しい意味を陳腐化させてしまうのはどんなものかな。(例えば、リストラクチャリングとか)

日本語は大切です。本多勝一著「日本語の作文技術」(朝日文庫)は読むべきです。”Are you a gentleman, Mr.

Jonston?” “I would like to be a gentleman, your majesty.”(「紫禁城の黄昏」を読んでいませんが、「ラスト・エンペラー」は観ました。) 朝鮮半島をなんとかしなければ。がんばれ外務省と防衛省&海上保安庁&自衛隊。内閣調査室はどうしてるかな。

[< 前へ](#)

[次へ >](#)



Made on a Mac